

親しい若い皆様よ

大正七年十一月十五日

親しい若い皆様よ！皆様は今何を考えて暮らしていますか。何を為して暮らしていますか。何を聞いて暮らしていますか。

朝から晩まで考えることは自分の利益にのみなることや、他人の出世や幸福を見て悪むことや、どうかして他人に自分を賢く美しく思わせることばかりが多くはありませんか。皆様は、濁った濁った世の人々が、自分の方に自分の方にと、自分の利益になることや名譽になることばかり考えたり、犬畜生が一匹の魚を争う様に、人と人とが尊い乱れているのを毎日見はしませんか。

皆様は、こんな人たちの中でやはり、その勢にひかされて、自分の利益や名譽になることや、他人の財産や幸福や風体を見て嫉むことや、親兄弟友人を泣かすことや、無駄なお金を使うことや、自分の不幸を嘆くこと、こんな事をなすことが多くありませんか。

ああ！私はつまらない人間です。心は悪いことのみ多く考えていました。そしてそれが好きでした。目はやはり悪いことや、つまらないことを思うのが好きでした。耳は、世の中の賤しい出来事や、他人の不名譽になることや、無駄なことのみに進んで聞きました。口は他人を悪い様に言っておとしめたり、他人を欺いたり、自分をいかにするために使ったりすることに一番よく使いました。体は他人のためになることをした事は少なく、心から同情して人に物を与えたこともありません。世のため国のためにもまた力いっぱい働いてはいなかったのです。この手はつまらない事にも、親の辛苦の凝結であるお金を出しました。この足はあぶないところにもつまらないところにも行ったのです。幾度か、自己の理想や事業に向かつて成功しようとして大決心、大勇猛心、大奮発をおこした事はあっても、その十分の一も出来たことはない。ああ、僕は自分ながら自分の心や体がなまけなくなりました。自分で自分を見下げはててしまいました。

それだけでなく、人生の目的とは・・・幸福とは・・・宗教とは・・・こんな疑いも次から次へと出てきます。僕の間からは止めどもなく熱い涙が出て悲しくてたまらない。死ねばいいか、消えればいいのか、生きればいいのか、迷わなければならなくなりました。

しかし、僕は救われました。救われました。如何に歓喜が僕の心をおどらしたことでしよう。

若い皆様、皆様は現実の苦しみに泣いてはいないか。あるいはまた安価な享樂に一時の苦からのがれるに苦心しはしませんか。お金がなければ駄目だと悲しんでいる貧しい人はありませんか。親しい父母に早く別れて、この世をつまらないと思っている人はありませんか。自分が病氣なのや体の弱いのをはかなんでいる人もありま

しよう。家柄が悪いと言われて悲観している人、不具なのが悲しい人、家うちが悪くて面白くない人、人に馬鹿にされて無念で残念で、瞋恚の炎に燃えている人、子供に親切にされないで泣いている親、親が自己の思想を知ってくれないと怒っている子供、自分で自分の意志が弱かったり、事の出来ないのを見くびっている人、こんな色々なことで苦しんでいる人はありませんか。

迷う人は苦しい。ちようどそれは煙の中にいる間はいくらもがいてもがいても煙たいのです。煙の上に出ましよう。眠りから覚めましよう。心の光を見いだましよう。

皆さんよ、穢い泥の中にも蓮の花は咲いた。浮華文弱の元禄時代にも四十七士の精神的美花は開いた。世の中は悪魔の世の中となつても、その中に住む自分たちまでが悪魔となり、けがれては駄目です。目を覚ましましよう。僕と二人であの尊い光を見ましよう。献身的に努力的な生活に入りましよう。そうだ、二人で、ただ二人で働こう、苦しもう。その生活、その苦悩は、引いて永遠の幸福、真の感謝に入ることが出来るであろう。僕らには金はなくてもよい。働けば得られるから。食べ物はずくてもよいではありませんか。それでも生きて行かれるから。人は自分等を悪く言つてもよいではありませんか。

自分の心さえ正しければ、たとえ前は悪くても、洗われ救われて正しくなれば。人の道をはづれて貯えた金が何でしょう。弱い者からいじめ取つた富に何の価値があるか。大きな家も何だろう。人はその大きな家をはなれ、金銭、衣服、飾りをみんな取り除けて、生まれたままそのままと、それに自分の努力で勝ち得た精神的なある物とよりほかに価値を見ることは出来ません。

僕らはもつともつと心が直くて飾らず、本当の自分をさらけ出してみようではありませんか。その時にのみ僕らは自分のつまらない事、悪いこと、いやな事が真実に知られてくるでしょう。

しかし、皆さんの中には「私はそんな悪いことはしない、自分は頭もよい、今もなお勉強を続けている、自分は自分で尊く思っている」こんな言う人があろう。そんな人は夜色沈々として更ける時、独り自ら考えてごらん。不具の人を見たとき嘲笑をしたことはありませんか。心から気の毒に思つて泣きましたか。親から送つた学資や買つてくれた着物を一度でも、ああすまないと親を拜んで使つたことがありますか。恩を受けた人に感謝しましたか。否、かえつて恩を仇で返したことはありませんか。あなたを人がいじめたり、罵る時、その人を哀れな人間と思つて、その人のために幸福を祈り、また退いて、自分の心や行を反省してみたことがありますか。解りましたか。かくした時、僕らはきつと自分のけがれていることに気がつこう。それで好い。自己不満を感じ、懺悔の涙にくれた時、そこには必ず救済の道が開けています。しょう

僕と一緒に行きましょう。まづ正しい「人」になりましょう。悪い心に責められた苦しみから、善を求める尊い苦しみに進みましょう(実際は苦ではないが)。それはきつと歓喜の趣味的生活に入るでしょう。僕一人より、あなた二人と、二人よりも、あなたの友と三人、三人より四人と、出来るだけ沢山の人と共に進みましょう。

ただ「僕らは楽しければいいのだ、金さえ得ればいいのだ、名誉にさえなればかまわん。苦しんで『人』になろうなどと思はん、人生五十年だ、太く短く、心愉快に自分さえ暮らせたらいい」こんなな思う人にもちろん用事はありません。

僕らは人生のために、社会のために、神のために、仏のために働かなければなりません。烏合の衆が百人来てくれるより、醒めようと心から望むあなた一人が僕にはどれだけ嬉しいやら尊いやらしれないのです。

醒めんとする若い男子諸君よ、来れ来れ、しかし僕らを鞭打てよ。

君らは十日と風呂に入らないことはあるまい。一日として顔を洗わないことはあるまい。それなのに心を洗うことは一年に一度もしない人はないか。学校で修身の話も聞いても、物見がてらに一生寺に参詣しても何が得られよう。心を洗うとは、汚れた邪悪な心を一度でも善美な崇高な事項や、話や、行為や、精神によつて、感激して心の垢を除けて心の光を出さすようにする事だ。僕らは一日に一度でもいい、心から懺悔し、黙考して、幾久しく、心の光明を見いだすよう、心の奥の深い泉を流して洗わねばならぬ。諸君の前途には幾多の艱難辛苦があるろう。多幸な時は失敗の基だ、誠ねばならぬ。死にたいような不幸失敗があるろう。その時すら、僕らは仏に感謝し、悲観の代わりに大勇猛心によつて突破しなければならぬ。しかしその信念はその時に得られるのではない。今から醒めよう、今から真の人になろう。

ゲートルは「汝にして真に熱心ならしめば、後と言わず今直ちにこの瞬間において為すべきを為しはじむべし」と言った。

若い女子の皆様よ、世の中には女子の使命たる「人生を美化し、浄化する」ことを忘れて、怒りやすく熱しやすく理知の判断をあやまつて、目の見えない鳥の様に、至る所で鼻をうち、頭をうち、口をうつつて、ここからそこ、そこからかしこと、迷い迷つて自分で知らないでいる様な人が世の中にいるのを、僕は悲しまずにはいられます。僕は女子を馬鹿にしたり、腹を立たせようと思つて言うのではありません。姑息な愛や慈悲のために夫の一生をあやまつたり、自分の一生を滅ぼしたり、子供の一生を反古にしたり、名誉ある夫の地位を失わせたりした者は古来、否、今の世も沢山あります。

同情は皆さんの最も大切な美しい宝です。そうです。至宝です。優しい皆様の中から流れて出る同情は、たとえば深山から清く流れて出る泉です。如何なる鬼のような荒くれ男の心でも和らげて人の情に泣かせます。その偉大な力は如何なる汚れたる者をも浄化し、如何なる無情な者をも翻然として人の道に活きさせます。よく考えてごらん、皆様はこの唯一の武器は如何に使われました。ともすればこの清い流れは濁つて、しかも反対に流れはしませんか。人を嫉む嫉妬の滝となつたり、瞋恚の流れ

と化したり、邪見の雨と降ったり、愚痴の湖となりはしませんか。奥に行きましよう。皆さんの心の奥の奥に遡って、この泉を力いっぱい奇麗に澄ませて、清いままを人に注ぎましよう。

若き諸君よ、親しき同胞よ、清き者はいよいよ清く、穢れた者は清められん事を求めて救われましよう。イエス・キリストは五人の夫を持ち、一人の情夫を持つていたサマリヤの女をもとがめず、これを教え、これを救い、そして永生に入らせました。釈迦は菩提樹下で、心中の百千億万無量の悪魔と戦って、終に「無上正等覚」の位に入りました。一念発起するとき、弱き者は強められ、悲しき者は救われ、不幸の者は祈られます。自己の小さな知識を鼻にかけてはなりません。自分の汚れている事を嘆くこともいりません。奮闘しようと言うのです。救われようと言うのです。幸福になろうというのです。

将に精神的に亡びようとする村、家、字を目の前に見えています。そうです。あえて言います。利己のために亡びようとする村、字、家を見ては、いたずらにため息を出しているだけではなりません。夜半鈴張河辺の古樹は僕に「哀れなる亡びんとする村よ、倒れんとする字の人よ、もがいているのを見るのがつらいわい。若者よ、活きよ、醒めよ、正義の水に・・・」とあわれに悲しく歌って聞かせました。

諸君よ、奮え。諸君よ、醒めよ、人になろう。僕の言わんとすることはつきた。

心の琴線が僕の心と共に鳴る人、そうだと感じて大勇猛心の起こった人、醒めようと思う人は、一人でも、友達と二人でも、兄弟姉妹と三人でも、僕のところへ何か書いて送ってください。好奇心や人真似や飾りの人は一人もほしくありません。こうして集まった人、それは真に語るに足る人です。他村の人も他県の人も少しもいません。皆さんには知らない友が出来るでしょう。そして、僕は何かはじめたいと思います。

十一月十五日

住岡狂風謹述